いつのまにか仲良くなっていた。
互いに名前も言わないまま、GREEN SPRINGSの敷地を淳は、赤セーターの男の子と走りまわっていた。親たちは買い物に夢中だった。

「なんだこれ」と噴水近くのアート作品の前で立ち止まった淳は、赤セーターの子に聞いた。
「アートだよ」とその子は言った。自分とおなじ5歳か6歳にちがいないのに、大人びた態度だった。負けられない、と淳は思った。
「わかった、鳥だ！」
空に向けて飛び立つ鳥のように見えた。先に答えを言えた満足感とともに淳は赤セーターの子を見た。その子は腕を組んで、作品から一歩離れた。「風だよ」と赤セーターの子は言った。風だって？　風に形なんかあるわけない。そう言ってやりたかったのに、あらためて作品を見た途端、ほんとだ、と思った。
「ほんとだ、サンタさんのソリを運ぶ風みたい」と淳は言った。すると赤セーターの子も「ほんとだ、すげえ！」と言った。

淳は母親を見つけ、サンタを連れてくる風を見つけたんだと報告した。名前も知らない友達といっしょに特別なプレゼントを見つけた気がして、淳はずっと笑っていた。
「またな！」と聞こえて振り返ると、赤セーターの子は親と手をつないで帰っていった。

あとになって「あの子はサンタの子だったんじゃないか」と淳は考えた。そう思うと、来年もまたあの「風」の下で会えそうな気がした。

Precious Time with Someone

Message